編 集 後 記

編集長　　小　西　　敦

2020年１月、新型コロナウイルス感染者が日本国内において最初に確認されてから、３年近くとなろうとしています。最近のオミクロン株は、重症化のリスクは比較的低いとされています。しかし、第90回新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリーボード（2022年７月13日）の資料６によれば、「新型コロナ・オミクロン株流行期」における60歳以上の致死率は、1.99%と、季節性インフルエンザの0.55%と比べると、かなり高い数値となっています。同資料にあるように、両者を「比較する際にはデータソースの違いや背景因子が調整されていない点等に留意が必要」です。とはいえ、厚生労働省のウェブサイトによれば、2022年９月14日０時現在で、累計の死亡者数は、42,977とされています。単純計算すると、年平均1.5万人以上が亡くなりました。また、季節性インフルエンザに比べると、新型コロナウイルス感染症の場合は、医療へのアクセスが難しく、このことが、結果として、救急医療や救急搬送の逼迫等を招いているとも考えられます。いずれにしても、今回の新型コロナウイルス感染症の様々なデータを分析して、感染症や保健医療に関する諸制度を見直すことが必要になると思います。

本誌に掲載された２本の査読付き論文は、いずれも、保健医療に関するものです。直接的には新型コロナウイルス感染症とは関係しませんが、事実を丁寧に分析して、実践的な改善に結び付けていく、という研究は、保健医療に関する諸制度の見直しにとっても、有益なものです。研究の今後のさらなる進化に期待いたします。

本誌の投稿者、巻頭言をご執筆いただいた八木研究科長、お忙しい中、限られた時間において査読やその準備をしてくださった先生方、本誌の発行にご尽力くださった編集委員をはじめとする先生方、さらに、困難な環境下において発刊に至る事務全般を行ってくださった増子かおり様、にお礼を申し上げます。

新型コロナウイルス感染症は、遠隔会議システムによる会議開催の日常化など、社会に新たな変化ももたらしました。本紀要も、現在の本研究科の紀要として求められる役割を果たせるよう、努めてまいります。論文等のご寄稿に加えて、本紀要に対するご意見・ご感想もお待ちしております。